

## 茅先生と茅コンファレンスの思い出

金 森 順次郎

岩波全書の「強磁性」などのご著書からお名前とご業績は存じ上げていたが、茅誠司先生をはっきり認識したのは、一九五二年にアメリカから帰られて確か物理学会で講演をされたときである。久保亮五先生をアメリカの空港で出迎えた話やアメリカの学者たちとの交流についてのお話を直接お聞きして、その独特のお話振りが強く印象に残った。当時アイゼンハウアーが大統領の就任演説で、科学の国際協力を説き、各国の優れた分野を列挙したとき、日本については「磁性」が述べられた。それは本多光太郎先生からの伝統を指していたと思われるが、茅先生が戦後早くから日本の国際社会への復帰に尽力されていたことも大きく与っていたことであろう。一九六三年の第一回の茅コンファレンスに参加させていただき、それからしばらくの間は、私の研究に関連して講師に呼んでいただいたときに参加していた。その度に茅先生のお話を拝聴したが、日本の経済から開催地の話題にいたるまで、私にとってはそれまで聞いたことの無い大所高所からの観点が盛り込まれた内容で幾つかが今でも記憶に残っている。一九七八年えびの高原での「鉄の物性」についての会議では、たしか宮崎交通の社長が先生の長年の知己で、高原の道筋にコスモスの種を蒔かれて、花の高原を実現されたことを紹介された。その他、物性研創設の時には直接大蔵省に行かれて予算復活を掛け合われたこと、敗戦直後には石炭増産が国を立て直す有効な手段だと考えられ、それに物理屋が協力するために、炭鉱で働く人のためによく聞こえるラジオを提供することを思いついたなどである。会議では、茅先生がいつも正面におられて、熱心に講演を聴いていただき、ときには無理な質問には助け舟を出していただいたこともあり、理論の意義を一番理解されているという印象をもった。

一九七五年、私は遷移金属合金の磁性に関する研究について山路ふみ子自然科学奨学賞を受賞した。選考委員長は茅先生で、私の研究を非常に強く推薦していただいたことを後で知ったが、授賞式でも大変お褒めの言葉をいただいた。先生のご好意は薄々感じてはいたが、その理由の一端を知ったのは生誕百年に当たる一九九八年甲斐大泉での茅コンファレンスである。特別セッションで、故伴野雄三氏が、茅先生は一九四〇年代にニッケルの強磁性についてのスレーターの論文を読まれて、電子間の相互作用の評価が間違っていることに気がつかれ、大変悩んでおられたという思い出話をされた。その問題に一応の答えを出した一九六三年の私の仕事を、先生は早くから評価していただいていたに違いない。その後の合金の仕事も、大変興味をもって聞いていただいたことも懐かしく思い出される。一九八二年の磁気国際会議の募金委員長ご就任をお願いにアイソトープ協会の事務所をお願いに上がったときがお目にかかった最後であった。

茅コンファレンスの運営方式は、研究者間の交流の機会が限られていた創設当時では、非常

に新鮮で魅力的であった。創始に尽力された方々に改めて敬意を表したい。一九八〇年代の後半鈴木平氏が茅基金運営委員会の委員長時代に、運営委員に加えていただき、委員長からは茅コンファレンスを組織することを考えるように示唆されていたが、本務の大阪大学で管理職を続ける羽目になりご期待に副えなかった。ただその関係で平成に入っても度々茅コンファレンスに出席させていただいた。一九九三年の第三十回までは、長老の方も出席されていて、特に久保先生とは一緒に谷口シンポジウムをお世話していたので、主題の選択で茅コンファレンスの講演を参考にして議論することも多かった。また、一九九七年から財団法人の国際高等研究所に関わるようになったが、総合的な報告をめぐって自由な討論をたたく運営スタイルの茅コンファレンスの経験が大変役に立った。国際高等研究所は、人文・社会・自然科学にまたがる課題について多角的な研究から新しいコンセプトを創造する大小二十余りのプロジェクトを実施している。そのさい、講演時間を時には上回る時間をその後の討論に費やすことと、参加者は院生や教授、企業研究者等の区別なく、すべて平等に討論に参加することを原則としている。

四十六年の歴史を振り返ると、最初は最年少に近い研究者として参加したが、大変生意気に余り年齢のことを意識していなかった。中期以降少し気になったのは、講演者はともかくとして、聴衆が長老クラスと若い人に二極分離している傾向が目立ったことであった。最近では、多分長老が体調の問題や研究の発展について行けなくなったことで目立たなくなり、一方若い方が中堅から指導者層へと移って行って、再び老若中年が入り混じって好ましい雰囲気醸成されているように思われる。そのときに茅コンファレンスの幕引きになるのは、いささか残念の気もするが、有終の美を飾ることになったともいえる。茅コンファレンスの精神は、いろいろな形で今後も生きて行くことであろう。

（（財）国際高等研究所長・大阪大学名誉教授）